

# 日本のふるさと・明日香村からはじまる 農と食の体験

農事組合法人 一穀あすか

農業再生と食育



掘り出すまで、もう一息。みんなが見守る中、腰を入れてスコップをふるい、筍掘りに専念

食農体験とともに守る  
明日香村の歴史的な景観



「やったあ、柔らかな日差しがそそぐ初夏の竹林の中で歓声が上がる。大きな筍が土の中から取り出された。子どもたちも、自分が手伝って掘り出しただけに満面の笑顔。ここは奈良県明日香村にある竹林。元々農地だったところが長年放置され、竹に被われてしまった場所だ。それを整備し、たけのこ園にしたのは、農事組合法人「一穀あすか」の人たち。

同事務局長の森本吉秀さんはこう言う。「日本のふるさととも呼ばれる明日香村で、私たちは生まれ育ち、今農業をしています。ところが、農家の高齢化や担い手不足によって、遊休農地や耕作放棄地など荒地が拡大しているのが現状なんです」。

二八年前に、地域の開発を制限する、明日香法が制定され、以来この村は、貴重な歴史的景観の保存をその使命として担ってきた。そのために、農業立村がたわれたが、「その当時から比べると、すでに農地は半分ほどになっている」といっ。

筍掘りを始める前に、参加する人たちで記念撮影



小さな子どもたちも、それぞれに筍を掘るお手伝い



遊休農地を借り入れて再生したブルーベリー園。写真左下には受粉の手助けをするミツバチの巣箱が見える

こうした現状を打開するため、村内の農家を中心に十一人が集まり、平成一八年四月に遊休農地の利活用や新規就農者の支援を活動の柱とした農事組合法人「一穀あすか」が誕生した。このままでは、明日香村の農業とそれを基盤とした景観の保持の両方がだめになってしまう。やむにやまれない思いからの出発だったという。

まず取りかかったのは、元は果樹園と畑だった真弓が丘地区の整備。長年放置されて竹と樹木が生い茂っていたのを、手作業で取り除いた。竹林での筍掘りの体験農業をスタートさせ、再生された畑には芋類を植えた。そして、その植え付けや収穫の際には、地域の幼稚園児たちを招待。

「地域に農地がある意味や、そこにいるるな作物が作られているということ」を、特に地元の子どもたちに実感してもらいたいんです」と森本さん。

昨年七月には、基盤整備された後に耕作放棄されていた別の農地を借り受けて再生

し、「あすかベリー園」を開園した。見晴らしの良い丘陵地にある五〇アールのこの園では、無農薬で栽培されたブルーベリーの収穫体験ができる。昨夏は、明日香村の観光も兼ねて、他府県から多くの来訪者を迎えたが、ここも同時に地元幼稚園児の体験学習の場として活用された。

こうしたイベントなどを通じて、「一穀あすか」の活動への共感者も増えてきており、地元での農地の提供者や外部からの就農者も現れてきた。

現在は真弓が丘にブドウ園も整備中で、隣の畑ではニンニクの栽培を開始。

「事業として成り立たせることが先決ですが、ここでの収穫体験などの各種イベントを継続しながら、これらの施設をつないだ、アグリツアーなどの受け入れも考えています」と森本さん。農業振興と景観の保全、そして農と食の体験学習などの試みがうまく融合していく展開が期待される。

(文責・CEL編集室)

CEL

### 農事組合法人 一穀あすか

〒634-0138  
奈良県高市郡明日香村越72  
TEL.0744-54-5757  
<http://web1.kcn.jp/ikkoku/>



復元された畑に植え付けられた芋の苗。畑があるのは見晴らしの良い丘陵地で、近くにマルコ山古墳がある



真弓が丘は元々果樹園だったが、放置されていた(写真上)のを、一穀あすかの人が草木を取り除き整備した(写真左)



遊休農地を活用して開園した「あすかベリー園」でブルーベリー狩りを体験する地元の幼稚園児たち



自分たちの顔くらいい大きさで育ったさつま芋の収穫に大喜びの園児たち